



郷賢庭文庫



男色大鑑

本朝若風俗

第一回巻

喜多村藏

目録

一

情小沈せ鶉鶉觸



二丁目

二

身がりり小立若色丸袖

六丁目

加賀を去る月も取決め乃事
寺乃色蕨系糸風の吹る
死縁いともぬ世の中の中のみ

二

三

侍道一の三年目の命

十二丁目

急侍乃うさかひ晴る事
武士の情と養親とやめぬ事
位牌九かりて力と志成り

四

縁め淡く老木乃花の比

十七丁目

年い寄物ねがふ心背の事
生れは死の丸顔と物とれたの事
竹第小女いちりり扱えの事

五

色囃しの扱ひもれ迷哉

廿丁目

現れちかたにうらな目果とらふ事
外紀が命乞ふ河物けの事
元くたに養女も扱らふ中の事

目録終

情小沈む鶴鶴盃

今乃初室町通の表はとれと廣かぬ屋つ
らりと柱の去松摺丸右松の皮付摺乃八角又い度
本とつひむしめくあは智まの扱鼻髪とま
久小指子と世小河内野の作と扱多る。うら河内と海の
勢な事と云古事と指さしておへる河内一系
よははめがつかれりあはけととる。ほ子細い松原通り
とあへた美丹波只る入目あしてあり難れり家より
外へもあは津去宗や。祇堂あ乃社いあむむたや。
玉祥乃たど一箇小女席とらひ小憐と世の扱女も
多。後このこく小憐あ事。あかんぬれ難れみと
あれい難いめくふ事と扱れ。とひさるんたどく

真と云ふべし男と云ふ西海才一の大臣新左衛門の長
柄と云ふ小比花の咲くもれ吉野と云ふ入をあの後
の橋の若くとも鳥居と云ふる是も中絶と云ふ所は
方の本意小舟と云ふ一。時書乃源の月為く雲と
た揃れ枝と云ふれおれ君も河と云ふくはけく。
さしおんの下あぐれを渡り房枕と云ふれ洞
窟の上端十の表のうき作と云ふる名も此方の村
しむと云ふ枝堂と云ふれ文の編り小信小書一。小町
何と云ふておれ梅角一。弄乃のいともおれ流き小ぬぬと
琴常信のそとあそび河勢松と云ふれ一。地下人乃
唇うごう一。投節作勢かりなごの各が少くて音曲
へかき小おりるるれ。まて情の乃偽りあて海

西氏年月まで乃整りたごひのさう通して約の
かすいひあつた。何まこの侍婢に梳又の表使も女
勝りて又他の一。所風俗の當流乃中わたり外よある
こ女と云ふれ。さうあつて階おろよ玉芙蓉と云ふれ
枝小葉深まれ八まつり。あまらるる今ありとひ
るれ。よそほひ。濡れ中うもれたとんかか。人々
人の花と云ふ。まお。あつた。おとく。毛と。時書
乃拒山下。湯城乃山陰小存。あつた。つ。ひ。勢。と。目。下
小保めおろ。一。嵐。山。と。庭。小。丸。大。井。川。と。泉。あ。ま。は。
け。跡。ま。れ。三。日。家。小。唄。く。い。ま。も。年。の。桃。花。と。馬。
く。く。乃。風。情。の。具。形。た。と。く。小。野。お。所。紙。細。書。人
う。俄。小。び。と。七。桃。花。庵。た。と。く。と。く。と。く。あ。小。鶴。鶴。貝。の

盃と流し美女たれ居振小きあひ侍弄とあらた
ゆめりく恋の云々いふ人く入つてまむひいあ
人の恥とかりえんは路分小とれたゆとあけけ
いあそとせ詞あそとあまのけし方とるる
執りのごとく女と貞松乃市目ありて丸裸
あされ二偏までいれられ廣をて過すのい
女中間色うてそりき書院の市やとに出入
乃志不の賢志樂出あまの換と打物
つるくあふびりあ人とせまぐんていれれ
いけとありて早着くの小風呂小入まつと貞松
より外いあひ入目あふびりて市目とれく是を
徳世のい出わりて市目小美の蓋とるくりりあ

小華流美のいれと是のちがたあまの
そと。され世のいりて金取也げ且取あもい
りてたげ自由の背小判がふゆと。くくあひ
はりて振乃利とれく一は書と程よたの
あ肉れ茶花とてい市車小あくも入のあ
鳥憎もと若く牛丸のまの具足と背小けく
乃登れつるぐと福。あ町の甚極乃と小
え所とあ。い首の徳と合せてれやりり
く乃貞向あれと登りけまてと。あ
くあやわまてと。あ。あ。乃市首尾
乃はれ合して書梅あひとあやまされ
とや帯の内籠ひあ目と月とか。着れ



とては遠く袖ふしつゝも人あはれなるも色紙の
 乃ゆきの目や南んせむれあり橋をくぬぬと情を
 け美事ありぬべし。そむ竹橋たきり里ん月あ
 親善堂とありし法師と常中色紙情乃友なれり
 今宵月りの見えぬ色紙つたてぬ産色脇
 突ふあそふ小来ふるん。唐主の戸と引たつら
 内へつらゆれくる。灯乃むり出ん紙意お振
 るは因氏親まは舟林居お考あはむりけし今ま
 見れし徳あれや。膳棚のし小味落しと志け
 垂れし出ぬのりお色紙の籠らるるや。園よ
 遠人ともて情もあらる入る。さし治す所時
 風清か所灯挑りあんとせし懐祝小来とそ

その影らに世道つひり暮小書おせし。松小来
 あつとあるし乃乃方とそとせしあへくんとそ
 一ち前の月。兵り海にこ糸酒のしと愛えて
 乃助の目お私毛しそ一葉の舞中らへ。後を来
 後家乃徳の美しそ。橋を小お海を坊色注油
 足らるへ。橋り情の物具と物よりあへくんと小
 咲初の色目越あへぬ。りよ小雲流し。福原のち子
 三千投りしそ。粒入のし。月日美梅のしけあへぬ
 目も注相倍りし。夫田のし。節の。お前の心産よ。あ
 とも細い会なと建たがり。りも。十七花あほ小あ
 らお愛おら。秋の方へあへぬ。の徳を。あへく
 を通りし。ゆり。秋あいらし。色。うらり。大。美。い

2
 2



四六

大田

とくめい... 小島... 何と世の中... 執心と掛られ... とくぬといふ... むさしあり... 神ぞくけ... 猿... 猿...

云葉小仍りあへば是ねまましく入るまへに
如来様とお後衆人と歎くほどつゝのちれ小痛く男振
小好くおもありとてんがうふふひひとて。まねがう二世ぞ
と御成かゝあゆりまれば南傳の里の座小居月とあると
あり。地蔵の半は口大の徳利かかりの石流菊とある
山崎酒。是とてけりら付あぬをねおちして。不中と
宿とて宿の心恋おせう。と見せまや。と後いかにた
結よむせ愛小も面転とら。程おありぬおれつゝある
とやんねのたもえんけおれ。城下小かかれめたゆ
りどとあそびわら今村六之進とつゝ男。お十郎を
あひ袖と救通と投入。ふらつゝ。えあんと。後れた武
士の尸解とていま。いやめとて。程あ。玉極小あゆく

た結と念比と尋さし。念小押と。い。なる。とん
申さり。時お十郎分判とて六之進と打果とてあひ
まふ。事あれた。た結とて堪忍ある所。とてい
る人の命承えんとあひ極めひそる六之進。座敷とて
あひ程の心をきひ外小守とあはれ。志。下。P。とせ。と
徳。あ。ひ。た。竹。崎。た。結。の。れ。ね。難。養。P。の。口。指。ひ。ひ。の
又。と。さ。一。城。お。た。男。う。れ。た。れ。と。の。の。お。か。し。程。小。お。の。水
後。進。た。結。と。入。た。れ。と。打。あ。り。と。あ。り。の。水。方。へ。程。ひ。来
ら。れ。と。い。つ。六。之。進。清。か。れ。と。あ。り。と。い。ひ。今。秋。の。内。お。と。ま。る
後。の。板。木。束。の。た。つ。ら。り。の。と。く。も。空。の。町。の。あ。ひ。あ。れ。は
は。堂。の。お。あ。り。て。秋。の。海。苔。と。た。結。が。あ。る。ふ。う。ら。と。あ
り。れ。と。い。つ。六。之。進。傳。合。も。用。意。と。く。野。乃。小。出。を

是れりあは浮世さう。ち十節松尾小海り水の後
又と他りく丸神乃御藏編をぬくい事と強一た
結末あり勢りPうらせし。お海小出人と共づる風
情ふさふさく並木深き小川と。六之進侍合を後
よりさかろく打つけし。お海も色せどまうと極よま
と強と。さうらうは後時骸あり。止目とさうれ
どふのせくまといふと定め通く先立近玉世の茂
と入し。さうらうあはれさうく我のわめり行て色た
結末固あはれさうお海り小海りおびりさうせ二
とひき通くさうらう。さうらうも十節ありあつてい
の程と強く又と世もさうらう。はさうのかさうのさだ
意地りさうらうお出神お出づつ。わめり男法とく甲斐

あ。世と小と。縁とくあがんと結。つづくと命の限
り成振め。小者小おらうと合は小Pあくめ。ち十節振
袖小若碧かりの編を小志のひ作。つた結が里小若く
小志小あけのひ。門とく色。ほをれとあせりく
Pおぞ。た結枕とあびく。四又友色。さうらうとくも力さ
ら。ととく。のさと起し。素徳の鞘を。おん。り。梅子
と吟味して。板門とひ。さく小志一勝とあ。さあ。お海
て。私。今。村。六。之。進。奴。僕。力。七。と。P。お。主人。六。之。進。を。侍。あ。す。お
は。今。お。た。念。比。P。う。ら。せ。し。は。く。の。結。末。の。上。小。海。り。の。行
つた。結。あり。と。強。と。謀。と。く。の。ひ。た。と。肉。俵。の。さ。う。の。後。中。と。ま
あ。り。下。人。と。さ。う。ら。う。と。あ。ま。う。と。P。さ。う。ら。う。と。時。極。ま
の。海。小。あ。は。れ。さ。う。ら。う。自。つ。た。年。月。乃。身。法。と。く。わ。め。り。が。れ。し

て後申すに蹴らるる打合せんとし置かすら
小やうくくけぬげは小集るる人の命と出さすの路
れつて下へあれたる主命とせしつたれあわら
久た武乃小にあらざるもあさあも出せり
屋中名乗あひしそん神人鳴らんとんかたり。却て
い原へへけ返さるとねまうとせむた路も
小おとわひ。何のもねおめくのせんごうれんを
名海ホよけけと立入とめけらる。健授るる干
師ぬとれびく先小立退付もへ入あつとつと
世今分別かりとて我とて下と下人わまは流
きとて本陰よりあふれは小集るる人とて
十師の面報小うらひのく。大振神れあれびは。恩

やとらりあひと地物あつて付小村本陰小切伏
下ひ見せん乃多やて天命のつたてかきとて
左後算小出てそれ今村六之進あり。是れと
宛あ乃小とと出。しれ子細と尋。小陰信氏
張るるが細氏肌とて。も十師がまふ小替り
心の程六之進が身と推して。それがあつて
しと死骸小腸あつて今年廿八歳の秋の末秋の
とぬ小ぬ。墓あや約の落とありぬ。お代りあ
三人がひいせれあつて七十八日の中も
小表も。意あつて人のあふるるあに
今小も十師がまははるるあつて。毎
わきのとらんらて後回さつて。又い

二二

仍水多るに拙りの親仁乃乃汗と流し多るは友と
せし年奇後法とんとかく色あけおとす骨の
ゆられ立しと接おろし細よりあつこの皺と怒り
洞小志のくま歌一曲掩朗読昨日少年今日白頭
と作り一色げあのかつあつひく今く悲しとあ
やさんさあしとくせと洞讀しゆとよふと
あかり湯れあふあゆまであげとくたはせな
とぶれし小み細紙あけくろ生圓の籠あのか
下ふありしむし玉結る水とく美取小籠も
ありと情多小女腐かた人くくう程あり又の独
りあき回来おあつとく民衆あつあつぬあり
ま水小ぬく怒り又またあつとく小つひ付十六十

九の年よりあ乃のかつひぬくまに海の中道ぬ
くつひとまひし中ふ外よりま水と執るひのや
む小わりの電山の火揚焼つて所人あまこわりて
あ方たふかりし周と幸れ橋小出首尾とあ
と助たかゆに打とあ。ま和思ひく木の丸乃
関と越く牙のうた涙より舟小丸あせるはく
力とかり今家小流れぬし年ま水の内十三判を
は十六まで昔の勢ぬほくの武人た小一生あ
とせんとしけ年と世とさうし是あつあつとぬる
今もま水とあ年のくつひつてそまはた
あつあつたのあつとつたあつあつとあつあつ
とあつあつとあつあつとあつあつとあつあつ



一和四
一
ふあはげい息女は遠東清た島といひ一婦人旅の婦然
たどるのづれの中おれたつは派はう母ふあひあるん
ふのく年久く思ひく往來とせりありのづれといへ
おとあふとあど度度うん席にのりく是北小武姫
小物来し。来年の春の日の女房がよおとせりあふ
目出なふいへくも方妻にせんといひ一申せあふ
よたりさあめ世のかあやといし斬つは守人又あふ
さあふ派とあり。さあめ女はもと命いさうとせり
く小情むふそ大程親去給たま一命お掛てか
さうく所折折りあげ。親ひのう命と九信外記を
家子あふ。別れ給とせりひく親去のうたといひ
とたもあふゆつり親子かといひとあ計るとなり

